



一話

ふたりの秘密

空調の音がかすかに響く夜のフロアには、残業を続ける社員の気配がない。

（せっかくの金曜日なのに、今夜も終電になりそうだな）

入社一年目の安堂は、先輩から押しつけられた仕事を当日中に仕上げなければならなかった。

企画書の九割は安堂が仕上げたものだ。だが、月曜日の朝になれば先輩が我が物顔で部長に自分が考えた企画だと言って提出するだろう。

（早く部署異動をしたい）

配属されたばかりの頃は、憧れの企画課の一員になれたことへの喜びが大きかった。

だが、今では仕事を押しつけてくる先輩から逃げたいという思いの方が強い。

ようやく企画書が完成し、帰り支度をしようとしたときだった。奥の方からガタンと大きな物音がした。

音がした方は、社長室がある方向だ。

（まさか……不法侵入者？）

足音を立てないように社長室へ向かい、緊張で少し冷たくなった指先で重厚な扉をそつと開けた。

足を踏み入れた瞬間、安堂は目を見開く。

「社長……？」

広い執務室の窓際、デスクに続く床に、大柄な影が崩れ落ちるよう
に倒れ込んでいた。

安堂は床を蹴るようにして駆け寄る。

そこに倒れていたのは、社長の高塚龍だった。

日ごろから社内では冷徹で、誰に対しても隙を見せない完璧主義の
男として知られている。

だが、今の彼の顔には深い隈が刻まれ、熱に浮かされたように荒い
息を吐いていた。

「君は確か……」

「企画課の安堂です」

「……安堂」

弱々しい掠れた声が落ちる。

額にはうつすらと脂汗が滲み、スーツのジャケットは脱ぎ捨てられてシャツの襟元が乱れていた。

（すごい隈だ。まさか寝ていないのか？）

「大丈夫ですか？ 支えますから、起き上がれますか」

「ああ、すまない」

安堂が差し出した腕を掴む高塚の手は、信じられないほど熱を帯びていた。よろめく巨体を支えながら、安堂はどうか応接用のソファまで運んで横たえさせた。

ソファに沈み込んだ高塚は、苦しげに眉間を寄せたまま、ふっと意識を手放したように静かになる。

間近で見ると、端正な顔立ちがやつれ、常に張り詰めていたはずの
雰囲気 が脆く感じられた。無意識のうちに、安堂は震える高塚の額か
ら乱れた髪をそつと払いのけていた。

（……こんなに追い詰められるまで、耐えていたのか）

彼、高塚龍は高塚グループの会長の孫のひとりであり、その中でも
彼は飛び抜けて優秀らしい。

二十九歳にして子会社の社長を任されているのは異例であり、会長
からも期待されている存在ということだ。

（だからこそ、背負っている重圧も大きいのかもしれないな）

威圧感をまとう社長の、誰も知らない脆い姿。

見てはいけないものを見てしまったような気がして、安堂は気持ち
が落ち着かない。

それから、翌朝の六時まで高塚は眠っていた。

安堂はその間も付き添い、濡らしたタオルを高塚の額に当て、いつ起きても大丈夫なようにスポーツドリンクや軽く食べられるものをコンビニで購入して用意をしていた。

目を覚ました高塚は、昨夜の記憶がないようにで酷く驚いていた。

「……すまない。醜態を見せてしまったな」

「そんなことないです。ですが、疲れたときはしっかり休んでください」

心配する安堂に高塚は、戸惑った様子でただ頷いた。そして、安堂が用意しておいたスポーツドリンクや軽食を見て、「すごいな」と呟く。

「え？」

「助かったよ」

口角がほんのわずかに上がる。高塚の微笑みを初めて見た安堂は、目を離せなかった。

（社長は思っていたよりも怖い人じゃないのかもしれない）

あの深夜のオフィスでの一件から数日後。安堂は突然企画課から秘書課へ異動になった。

仕事内容が変わり、最初は戸惑うことも多かったものの、一週間ほどで安堂は秘書課に適応していった。

（企画課よりも僕には合っているのかもしれない）

同僚たちとの関係も良好で、仕事を押しつけるような社員もいない。対人関係のストレスも大きく減っていた。

終業間際の社内で、安堂は内線電話の呼び出し音に心臓を跳ねさせた。受話器を取ると、聞こえてきたのは低く冷徹な声だった。

「社長室まで来い」

それだけ告げられると、プツリと電話は切られた。

なにか不手際でもあったのだろうか。

「失礼します」

不安を抱えながら向かった社長室で、高塚はデスクに向かったまま、冷ややかな視線を安堂に向けた。

「あのときの件についてだが」

「……あのとき、といいますと」

「俺が倒れたときのことだ。ありがとう。本当に助かった」

「いえ、そんな」

「君に迷惑をかけたお詫びをしたい」

お詫びと言いつつ、それは命令であり、拒絶の余地など微塵もない口調だった。

「今夜空いているか？」

「……はい」

「そうか。なら、食事でもしよう」

社長とふたりきりで食事。安堂にとってそれは、チャンスというよりも、危険な相手に近づきすぎってしまったように思えて危機感を覚えた。

下手なことをして粗相をしないか、社長を不快にさせないか。

そのことを考えて、安堂の胃はキリキリと痛んだ。

仕事が終わりに、連れてこられたのは、都内の一角にある高級ホテルの最上階だった。

静まり返ったラウンジで、ワイングラスを傾ける高塚の横顔は、相変わらず近寄りがたいほどの威圧感をまとっている。

最高級の料理が並べられていたが、安堂は緊張のあまりフォークを持つ手が微かに震えていた。

そんな安堂の様子を値踏みするように見つめながら、高塚はふとグラスを置き、低い声で切り出した。

「安堂。君に一つ、確認しておきたいことがある」

安堂は息をのむ。

「は、はい……何でしょうか」

「君はカントボーイなのか」

時が止まったかのように、安堂の思考が真っ白になった。

心臓の音が耳の奥でうるさいほどに鳴り響く。

カントボーイ。男でありながら、体の一部に女性の身体的特徴を持つ、ごく稀な特異体質。

安堂にとつて誰にも知られたくない、胸の奥底にしまい込んだはずの秘密だった。

（どうして社長がそのことを知っているんだ？）

「なっ、なにを突然……」

「安心しろ。他の社員たちは知らない」

高塚がワインをひと口飲み、不敵に微笑む。彼の醸し出す高圧的な雰囲気、安堂は身動き一つできなかった。

「私の秘書になる人間だ。私は部下の評価表から健康面、バックグラウンドまですべてを徹底的に把握している。もちろん、君のその体質のことも」

「っ……なぜ、そんなプライベートなことまで……」

「私の秘書を務めるのだから、当然徹底的に調べる」

秘密を握られたという恐怖と、自分のすべてを暴かれているという羞恥心で、安堂の手のひらには冷や汗が滲む。

「社長の望みはなんですか」

（これをネタに、僕になにをさせるつもりなんだ？）

「一緒に寝てくれ」

あまりにも唐突すぎる発言に安堂は目を見開く。

「な、なんでそうなるんですか！」

「君に看病してもらった日、久しぶりにまともに眠れたんだ」

（まさか……不眠症なのか？）

高塚の顔をまじまじと見ると、疲れ切っていて顔色が悪い。

ふと先日秘書課の先輩から聞いたことが、安堂の頭をよぎった。

『あの若さで子会社の社長なんて重荷だろうし、社長を目の敵にしている親族連中が連日嫌がらせみたいに突っかかってきて大変だと思うよ』

完璧で冷徹な若き社長だと安堂は思っていた。

だがその鉄仮面の下には、音を立てて崩れそうなほどの孤独と極限の疲労が隠されているのかもしれない。

偉大な会長の孫としての期待を一身に背負い、プレッシャーをかけられる一方で、血を分けたはずの親族たちからは敵視され、水面下で絶えず邪魔を仕掛けられている。

「……本気、なんですか」

絞り出すような安堂の声に、高塚は薄い唇を引き結んだまま、静かに頷いた。

そこに脅迫や悪意の色はない。あるのは、ただ限界を迎えた人間がすぎるような、切実さだけだった。

「頼む」

低く、しかしどこか頼りないその響きに、安堂は胸の奥をぎゅっと締めつけられるような感覚を覚える。

（ずるい人だ……そんな顔をされたら、断れるわけがない）

敵だらけの城で、たった一人で戦い続ける社長。彼が必要としているのはビジネスの才覚ではなく、ただ安心して息のできる平穏な時間なのだ。

高塚の大きな手が、安堂の肩をしっかりと捉えた。

拒むことすら許さないその力に引かれ、安堂は逆らうこともできぬまま、頷いた。

食事を終えて、高塚と共に安堂はホテルに向かった。

部屋の明かりは落とされ、間接照明の柔らかな光と、窓の外に広がる夜景のきらめきだけが、室内に気だるい影を落としている。

(……本当にこれでいいのか。相手は社長なのに)

胸の奥で渦巻く焦燥と恐怖を飲み込もうと、安堂は強張った唇をぐつと噛み締めた。

逃げる隙すら与えず、安堂の身体を高塚は大きな腕でしっかりと捉えたまま、ベッドへと押し倒す。

ふわりとシャツが沈み、覆いかぶさってきた高塚の影に息をのんだ。

間近で見上げるその双眸には、昼間の冷徹さとは違う、飢えたような深い熱が宿っている。

「……社長」

ふわりと漂う、高塚のスーツから香る微かな檀香木トリキユールの匂いが、安堂の嗅覚を強制的に占拠していく。

高塚の瞳は、先ほどの冷徹さが嘘のように、底知れない熱を帯びて暗く沈んでいた。

「あ、あの社長……やっぱり……」

抵抗しようと伸ばした両腕は、いとも容易く片手で頭上に押さえつけられる。

身動きが取れなくなった安堂が息をのんだ瞬間、高塚の顔がすぐ目の前まで迫った。

拒絶の言葉を紡ごうと開いた唇を、熱を孕んだ高塚の唇が容赦なく塞いだ。

「んう！」

強い独占欲を感じさせるキスだった。

無理やり奪われるような口づけに安堂は脳内が真っ白になる。

触れ合う皮膚から伝わってくる高塚の体温の高さに、なぜかふっと力が抜けていくのを覚えていた。

熱を持った唇が離れ、細い銀の糸が引く。

荒い息を吐き出す安堂の耳元に、高塚は低く囁いた。

「……心臓の音、すごいな」

耳元で直接響くその声に、安堂はさらに顔を真っ赤に染めた。緊張によるものだけではない、高鳴る鼓動のすべてが相手に透けて見られているような気恥ずかしさに、身じろぎして逃げようとする。

だが、高塚の腕はびくともしない。

「緊張しすぎた」

そう言って、高塚はあっさりと安堂を解放する。

「ゆっくりシャワーでも浴びてこい」

突然のことで上手く回らない頭のまま、安堂は這うようにしてベッドから起き上がる。

乱れたシャツの襟を慌てて正し、逃げるようにバスルームへと駆け込んだ。

ガチャリと鍵を閉めた途端、張り詰めていた糸がプツリと切れる。鏡に映った自分の顔は、耳の先まで紅潮し、熱を帯びてひどく怯えていた。

（本当に、どうしてこんなことに……）

シャワーの水音に紛れ込ませるように、小さく息を吐き出す。

湯を浴びていくうちに、混乱は少しずつ洗い流されていったが、胸の奥で高鳴る鼓動の残響だけはどうしても消せなかった。

バスルームの扉を開けると、湯気と一緒に心地よい気だるさが廊下に流れ出す。

タオルで髪の水気を拭きながら戻ると、高塚がネクタイを緩めてソファーに深く腰掛けていた。

「……ありがとうございました」

声をかけると、高塚はゆっくりと顔を上げる。髪を無造作に掻き上げたその姿は、どこか生々しい色気をまとっていた。

ふと、彼のスーツから漂っていた檀香木トリキユールの香りが、バスルームの湿った空気の中で再び微かに鼻腔をくすぐる。

高塚は射抜くような瞳で安堂をじっと見据えたあと、フツと息を漏らして立ち上がった。

「すっきりしたか？」

「は、はい……」

「俺も入ってくるから、自由にしていってくれ」

すれ違いざま、かすかに掠めた高塚の体温が生々しく伝わり、安堂は思わず肩をびくりと揺らす。

浴室の扉が閉まる音を聞きながら、安堂は心臓のバクバクとした音を落ち着かせるように、そっとソファアの端に腰を下ろした。

浴室から戻ってきた高塚は、濡れた黒髪をタオルで拭いながらリビングに現れた。湯気とともに漂ってきた清潔な石鹸の香りに、安堂は思わず息をのむ。

昼間のやり取りや、さきほどの強引なキスの記憶が蘇り、安堂の全身が再び緊張でこわばっていく。

覚悟を決めようと目をぎゅっと閉じた安堂の前に、高塚は歩み寄った。

「眠たいなら寝ていいぞ」

「……え？」

「ソファで寝たら風邪を引くだろ」

腕を引かれ、そのままベッドに連れていかれる。安堂の体がベッドに沈み込む。

（なにもしないのか……？）

戸惑っていると、高塚は髪を乾かしに消えてしまう。

てつきりこのまま襲われるのだと覚悟していた安堂は、拍子抜けしてどっと疲れが押し寄せてきた。

少しして高塚が戻ってくると、安堂の隣に横になる。

高塚は安堂を包み込むように腕の中に引き寄せ、その背中にしっかりと腕を回していた。

「しゃ、社長……」

「寝ていなかったのか？」

低く掠れた声が、すぐ頭の上から降ってくる。予想外の展開に、安堂は完全に思考を停止させた。

「あ、あの」

「こうしていると、落ち着くな」

そっと見上げれば、高塚が優しげな表情をしている。背中に回された腕の力は緩まない。

高塚は安堂をしっかりと胸元に引き寄せたまま、目を閉じてしまふ。拒絶する隙もなく、安堂は高塚の温かな体温に安心感を得て眠気が襲ってくる。

緊張はいつしかほどけ、安堂は戸惑いながらも、その大きな腕の中でそっと目を閉じた。

静かな闇に包まれた部屋の中で、しばらく穏やかな眠りについていたはずだった。しかし、深夜の静寂を破るように、肌を這う微かな熱に安堂はうっすらと意識を浮上させる。

「んっ」

目を覚ました安堂は、ぐりっと乳首を摘まれて体を震わせた。

「あっ♡」

いつの間にか、高塚の手が安堂の服の中に滑り込み、乳首をいじっている。

「……しゃちよう？」

高塚はふっと笑った。その手が、安堂の胸から腰のラインをなぞる。

「あ……っ」

熱を帯びた大きな手が腰に触れた瞬間、安堂の背筋に電流が走ったような激しい震えが走った。

「っ……あ」

慌てて身じろぎしようとしたが、逃げる隙はどこにもない。高塚はまるで獲物を逃がさない獣のように、すんなりとその動きを封じ込める。

「感じやすいんだな」

低い声音は夜の空気を含んで驚くほど色っぽく、耳元で囁かれるだけで安堂の頭は真っ白に染まっていく。

「ね、寝ていたんじゃない……」

「眠ったさ。……だが、もう目が覚めた」

そう告げた高塚の顔が、ゆっくりと近づいてくる。

拒絶する暇すら与えず、今度は先ほどよりも深く、絡め取るような熱い口づけが落とされた。

「んう♡」

吐息ごと吸い尽くされるようなキスに、安堂は頭の芯までとろかされていく。

「目が覚めたなら、最後まで付き合え」

唇が離れざまに紡がれたその甘い命令に、安堂は抗う術を失い、ただ熱に濡れた瞳で見つめ返すことしかできなかった。

「んあっ♡」

安堂の白い喉仏が、息を継ぐたびに上下する。

高塚はその首筋に唇を這わせながら、片手で安堂のシャツのボタンをひとつずつ外していく。

指先が鎖骨に触れた瞬間、安堂の身体がびくりと跳ねた。

「っ……あ、しゃ、ちようっ」

「触られただけで感じるのか？」

高塚の低い声が、耳朵を舐めるように響く。

安堂は首を振ろうとしたが、高塚の指が乳首に触れた瞬間、否定の言葉は甘い吐息に変わってしまった。

「ひあっ♡ んっ……や、そこっ」

「ここ、もう固くなっているぞ」

高塚は薄く笑いながら、親指の腹で乳首を転がすように撫でる。安堂は背中を反らせ、シーツを掴む指に力が入った。

「あっ♡ ああっ……んんっ♡」

「甘ったるい声だな」

そう言って高塚は、安堂の胸元に顔を埋めた。温かい舌が乳首をそつと舐め上げる。

「んあっ♡ な、舐めちゃ……あああっ♡」

高塚は片方の乳首を唇で含み、甘噛みしながらもう片方を指で弄ぶ。安堂の身体はびくびくと震え、腰が浮き上がりそうになるのを必死に堪えていた。

「あっ♡ あっ♡ しゃ、ちよう……っ、んうっ♡」

「普段からこんなに感じるのか？」

「わ、わかりません……っ、初めてなんです」

頬を紅潮させて、涙目で安堂が言う。高塚は目を見開き、「初めて？」と聞き返した。

「すまない。まさか初めてだとは」

離れようとする高塚の手を安堂が掴む。

「……このままやめるつもりですか」

快楽を与えておいて放り出すのかと安堂がムツとした表情で訴える。

（普段だったらこんなときと言わないのに……今はもっと刺激が欲しくておかしくなりそうだ）

「お前がいいなら、続ける」

「このまま放置された方が辛いです」

「そうか。今度はお前から誘ったんだからな。覚悟しろよ」

高塚の言葉に、安堂は真っ赤に顔を染めながら頷く。それを見て、高塚は満足そうに笑った。

「じゃあ、ここも初めてだな」

高塚の手が安堂のベルトに触れる。安堂は慌てて手を伸ばしたが、高塚の鋭い視線に射抜かれて、動きを止めてしまった。

「逃げるな。……俺が全部、教えてやる」

下着ごと引き下ろされると、安堂の秘部が露わになった。

男でありながら、女性のものを持つ特異な身体。高塚はその光景をじっと見つめ、満足げに目を細めた。

「もう濡れてるのか」

高塚の指が、安堂の秘裂にそつと触れる。

「ひあっ！」

安堂は息をのみ、太ももを閉じようとしたが、高塚の手がそれを阻んだ。

「……隠すな」

「や、っ……恥ずかしいので……そんなふうに見ないでくださいっ」

「命令だ」

高塚の低い声に、安堂は震えながらも太ももを開く。濡れた花卉が露わになった。

「ここを舐められるのも、初めてか？」

「え……な、舐められるって、そんなこと……」

「誰にもされたことはないんだな？」

安堂が頷くのを確認すると、高塚は顔を近づけ、その中心に舌を這わせた。

「んあっ♡ あっ！しゃ、ちようっ、そんなところ……っ♡」

高塚の舌が、くちゆくちゆと音を立てながら、敏感な突起を丁寧に舐め上げる。

「はう♡ んんっ……っ♡」

安堂は腰を跳ねさせ、必死に声を殺そうとするが、高塚の執拗な愛撫に、甘い声が漏れ続けた。

じゅ、じゅるじゅると卑猥な音が響く。

「あっ♡ ああっ♡ んっ♡ だめっ……そんな、舐められたらっ♡」

「ここ、もうとろとろだな。……俺の舌がそんなに気持ちいいのか」
高塚は指を一本、安堂の中に差し入れた。安堂は「あっ♡」と声を上げ、初めての感覚に身体を強張らせる。

「んっ……あ、しゃ、ちよう……っ」

「中もすごく狭いな。……ここに俺のを入れるんだぞ」

高塚の指が、中をゆっくりと押し広げるように動く。安堂は息を荒げ、シーツを掴む手に力が入った。

「あっ♡ ああっ♡ やらっ、んっ……あ♡」

「指が一本入っただけでこんなに締めつけるのか。……感じやすいな」

「あああ♡」

高塚は指を二本に増やし、安堂の中を丁寧に解していく。

安堂の内壁は熱く、指を抜き差しするたびに、ぐちゅぐちゅと淫らかな音を立てた。

「あっ♡ ああっ♡ しゃ、ちよう……つも、だめ、あああっ♡」

「ここか？」

高塚の指が、中のある一点を押し上げた瞬間、安堂の身体が大きく跳ねた。

「ひあっ♡ あっ♡ そこ、だめっ♡」

「だめ？ ここがいいんだろ」

高塚はその場所を執拗に攻めながら、もう一方の手で安堂のクリトリスを弄ぶ。

「ひうっ♡ ああ♡ あっ♡」

安堂は快感に頭を振り、涙を浮かべながら喘いだ。ぐちゅ、ぐちゅと卑猥な音が安堂をさらに興奮させていく。

「あっ♡ ああっ♡ だめ、イっちゃうっ♡」

「イけ」

「あっ♡ あああああん♡ ああああ♡ あ……ああ♡」

高塚の言葉に、安堂はびくびくと身体を震わせ、そのまま達してしまった。しかし高塚は攻めの手を緩めず、安堂の身体が快感に痙攣するのを楽しむように見つめている。

「あう♡ も、だめっ♡ あっ♡ ああああ♡」

「まだこれからだぞ」

高塚は自分のベルトを外し、服を脱ぎ捨てた。露わになった巨大なペニスに、安堂は息をのむ。

「しゃ、ちょう……っ、そんな大きいの……無理ですっ」

「大丈夫だ。ちゃんとほぐしてやるから」

高塚は安堂の手を取って、自分のペニスに触れさせた。安堂は戸惑いながらも、その熱い塊を握る。

「舐めろ」

「えっ、な、舐める……？」

「初めてだろうから、特別に教えてやる。……舌を出せ」

安堂は震えながら舌を出すと、高塚は自分のペニスの先端をその舌に押し当てた。

「……そのまま、ゆっくり舐めろ」

安堂は高塚の指示に従い、先端を舐め、口に含む。

「歯は立てるなよ。奥まで咥えるんだ」

「んぐっ！ んんう！」

初めての感覚に戸惑いながらも、高塚の手が頭を撫でるのが心地よくて抵抗する気が起きない。そして、彼に言われるがまま、安堂は少しずつ動きを覚えていく。

「……んっ、う」

「そうだ。……もっと深く、喉の奥まで」

「ん、う」

高塚の手が安堂の頭を押さえ、ゆっくりと腰を動かし始める。安堂は苦しそうにしながらも、高塚のペニスを咥え続けた。

「……上手いな」

高塚の言葉を聞いて、安堂はさらに深く咥え込む。高塚は満足げに息を吐き、安堂の頭を撫でた。

「……もういい。そろそろ挿れるぞ」

高塚は安堂をベッドに押し倒し、その身体の上に覆いかぶさった。

安堂の足を開かせ、自分のペニスを濡れた入口に押し当ててる。

「んあっ！」

高塚がゆっくりと腰を進めると、安堂は声を上げ、身体を強張らせた。

「っ……あ、しゃ、ちよう……っ、だめっ♡」

「力を抜け」

高塚は安堂の額に浮かぶ汗を拭いながら、さらに腰を進める。安堂は息を荒げ、必死に耐えていた。

「あっ……ああ♡んっ……あ」

「……全部入ったぞ。はあ……すごい締めつけだな」

高塚は動かずに、安堂が慣れるのを待つ。安堂の内壁は熱く、高塚のペニスをきつく締めつけていた。

高塚がゆっくりと腰を引くと、安堂は「あっ♡」と甘い声を漏らした。高塚はその反応を確かめるように、再び深く突き入れる。

「あっ♡ ああっ♡ んっ……しゃ、ちようっ♡」

「……気持ちいいか？」

「わかん、な……っ、でも……っ、あああっ♡」

高塚は安堂のクリトリスをぐりぐりと指で弄びながら、腰の動きを速めていく。

「ひぁ♡ はう♡ ああん♡」

「気持ちいいみたいだな」

「あっ♡ ああ♡ ああああ♡」

安堂は快感に頭を振り、喘ぎ声を上げ続けた。

「あっ♡ ああっ♡ だめ、っ……また、イっちゃうっ♡」

「イけ」

高塚の言葉に、安堂はびくびくと身体を震わせ達した。しかし高塚は止まらず、パンパンツと肌が重なり合う音を立てながら、中を激しく突き上げる。

「ああああ♡ はう♡ ああ♡」

高塚は安堂の足を抱え上げ、奥深くを突いた。

「あああっ♡ んあ♡ 奥っ♡ あああ……あ♡」

「奥が好きなのか？」

「ひあっ♡ そこ、だめっ！ ああああん♡」

安堂は連続する快感に、意識が飛びそうになりながらも、高塚の背中にしがみつく。

「あっ♡ ああん♡ おかしくなっちゃう……っ！ も……っだめえ♡ ああっ♡」

「……っ」

「あ、んっ♡ あう♡ しゃ、ちようっ、あっ♡ もう、だめ♡」

「……俺も、もう」